

フライ・ダディ

2007(平成19)年3月5日鑑賞(角川ヘラルド試写室)

★★★★



監督・脚本=チェ・ジョンテ/原作=金城一紀『フライ、ダディ、フライ』(角川書店刊)
/出演=イ・ムンシク/イ・ジュンギ/ナム・ヒョンジュン/キム・ジフン/イ・ヨンス/
キム・ソウン/イジュノイ・ジェヨン (エスピーオー配給/2006年韓国映画/117分)

……平凡なサラリーマンの中年男だって、ここまで痛めつけられれば、立ち上がらなければ……。韓国・日本を問わず、この映画を観た中年男はみんなそんな思いに駆られるはず……。中年男に奇妙な(?) 特訓を課する中でそんな勇気を与えてくれたのは、『王の男』で「美しい男」を演じて新人賞を総ナメにしたイ・ジュンギ。『ロッキー・ザ・ファイナル』で毎度お馴染みのファイトシーンとはそのレベルにおいて比べるべくもないが、心と与える感動は同じ……。こんな映画1本で、人生観が一変する中年男もいるのでは……?

主人公は平凡なサラリーマン!

格差が広がり、正規社員と非正規社員の差が広がった今の日本でも、「あなたの職業は?」と聞かれて「平凡なサラリーマン」と答える人は多いはず。しかし、ここで言う「平凡なサラリーマン」からイメージされる特徴は何かと考えると、結構難しい。私なりにあえて4つの特徴をあげると、①一定規模の会社に正規雇用、②妻子あり、③車あり、④マンションのローン残あり、というところ……。また、この「平凡なサラリーマン」の肉体的・精神的特徴を4つあげると、①会社に忠実、②妻子は後回し、③運動不足、④小心者……?

映画の冒頭、主人公チャン・ガピル(イ・ムンシク)の自己紹介がナレーションされるが、それによると彼は、①39歳、ある企業の課長、②妻と高校3年生の娘あり、③ローン残はあと7年、④スポーツとは無縁の小心者で愛煙家、という

ことらしい。最近体力の衰えを感じはじめた彼は、禁煙を実行しようと妻や娘に宣言しているらしいが、この手の「平凡なサラリーマン」の禁煙の誓いはあてにならないのが世の常……？

この映画のテーマは……？

映画の冒頭、ネクタイ・スーツ姿のガピルが必死で走っている姿がスクリーンに映されるが、その行き先は病院。急いでドアを開けたガピルの目の前には、右目に眼帯をかけ、左の唇が腫れ上がった無惨な姿でベッドに横たわっている愛娘のダミ（キム・ソウン）と、その側で涙ぐんでいる妻（イ・ヨンス）の姿が。ダミはカラオケボックスで高校生たちから暴行されたというわけだ。

そこで次のシーンは、加害者のカン・テウク（イジュ）が通っているチョンソル高校でのイ・ドクン教頭（イ・ジェヨン）たちとの話し合いになるが、それが少しヘンな雰囲気……？ 教頭も口では丁寧に対応しているが、「これは単なる子供同士のケンカだ」と断言するし、「親が謝りにくるべきだ」と主張するガピルに対して、「ご両親は忙しい」とワケのわからない言葉を吐くうえ、「あなたの会社での立場や娘さんの将来も考えなければ……」とヘンにすごまれる始末……。さらに遅れてやってきた加害者の本人テウクの謝罪の言葉もカッコだけ……。

思わずカッとなったガピルはテウクに食ってかかったが、逆にボディガード風の男から突き放されてしまった。後を追っかけさらに突っかかっていこうとしたガピルに対し、テウクは振り向きざますつと左の拳を伸ばし、ガピルの目の前で寸止め。こりゃまるでおちょくられているだけで、謝罪会見とは程遠いもの……？ この映画は、こんなシリアスな学校問題、社会問題をテーマとしたもの、それとも……？

ガピル役のイ・ムンシクに注目！

この映画の主人公となる、39歳の平凡なサラリーマンを演ずるイ・ムンシクは、1966年生まれだからガピルとほぼ同年齢。彼はヨン様ことペ・ヨンジュンや韓流四天王の1人イ・ビョンホンらと異なり、個性豊かな脇役としての出演が多い。

私が彼を観たのは『ライターをつけろ』(02年)、『シネマルーム 8』43頁参照)と『オー!ブラザーズ』(03年)、『シネマルーム 8』73頁参照)の2本だが、いずれも脇役。もっとも、彼の当たり役は『達磨よ、遊ぼう』(01年)と『達磨よ、ソウルに行こう』(04年)のデボン役だが、残念ながら私はそれを観ていない。

そして、彼は『麻婆島』(05年)で本格的初主演を果たし、300万人以上の観客を集めるスマッシュヒットとなったとのことだが、『フライ・ダディ』はそれに続く主演作。ここで彼が演じる平凡なサラリーマンは、実はストーリー展開の中で大変身していくことになるからそれをお楽しみに……。そして、シリアスなテーマだけではなく、彼らしくきわめてコミカルな演技とマンガチックなストーリー構成の中、ほのぼのとした温かい感動が湧き上がってくることに……。

プラス15kg、マイナス15kgにも注目!

映画俳優が役のために、極端に体重を増減するケースは多い。例えば、ハリウッド映画では、『インサイダー』(99年)でラッセル・クロウが体重を20kg増やした(『シネマルーム 1』46頁参照)、『モンスター』(03年)では天下の美女シャーリーズ・セロンが不細工なメイクをしたうね太っちょ女に……。そして何と増減差30kgという驚異の数字を記録したのが『マシニスト』(04年)のクリスチャン・ベール。韓国映画でも『力道山』(04年)のソル・ギョングや『クライング・フィスト』(05年)のチェ・ミンシクなどがそれ。この『フライ・ダディ』もその1つで、イ・ムンシクはこの映画のために体重をプラス15kg、マイナス15kgに……。

プラス15kgは簡単だろうが、映画撮影中に15kgも減量するのは大変。もっとも、この映画では、標高^{ナムサン}265mの南山の山頂にあるランドマークのソウルタワー(南山タワー)を目指してランニングという特訓を何度も課せられるから、減量のためのランニング=映画撮影だから少しはラク……?

イ・ジュンギの変身ぶりにも注目!

2006年に日本で公開された韓国映画として大ヒットしたのが『王の男』であり、そこで各種の新人賞を総ナメにしたのが「美しい男」イ・ジュンギ。1度こんな

特殊な役でイメージができてしまうと、その後の役づくりが難しくなるものだが、イ・ジュンギは『フライ・ダディ』では、1人で17人を相手にした喧嘩に勝ったという武勇伝を持つ高校生コ・スンソクに変身。もっとも、人それぞれいろいろな事情があるようで、彼は今は仲間のスピン（キム・ジフン）やセジュン（ナム・ヒョンジュン）と共に、高校生活最後の冬休みの過ごし方を考えている様子……。さらに、このスンソクが左目から左頬にかけて前髪を長くたらしめているのは、あの『蟲師』（06年）のギンコが義眼の左目を髪の毛で隠していたのと同じで、スンソクの左頬には刻まれたナイフの傷痕があったため……。スンソクのその傷は一体なぜついたのか……。また、高校生チャンピオンの連覇を狙ってトレーニングに励んでいるテウクが、公式戦ではないものただ1度だけ敗れたのがこのスンソクだが、彼は今なぜ読書に没頭し、毎日ニヒルな表情で何ゴトにも無関心になっているのか……。そんなスンソクの心の奥底にあるのは、どうも「ダディ」すなわち「父親」の姿のようだが……？

そんな複雑な性格をもったスンソクがたまたま遭遇したのが、新聞紙にナイフを隠して学校内に乗り込んできたガピル。「テウクを出せ」と怒鳴りながら、ナイフを持って突っかかってきたガピルを、スンソクはいとも簡単にやっつけたのは当然。しかし、病院の屋上で偶然ガピルと会い、彼にタバコを1本やったことのあるセジュンの提案によって、テウクに一矢報いてやりたいと訴えるガピルのためにある計画が……。

19歳と39歳の師弟関係は……？

2月1日に観た『ロッキー・ザ・ファイナル』（06年）では、現役の世界ヘビー級チャンピオンに挑戦する、今は還暦となったロッキー（シルベスター・スタローン）によるお馴染みの特訓風景が展開されたが、この映画では39歳の小太りの中年男の肉体改造と高校生チャンピオンへの挑戦のためのトレーニング風景が展開される。その師匠は、もちろん19歳の高校生スンソクであり、弟子はガピル。

韓国映画や韓国人が面白いのは、何ゴトも日本人より徹底してやるところ……。私は毎週1度、日曜日にフィットネスクラブで2時間40分をかけて20kmをマシン上で走り、1400kcalを消費させているが、これは15年以上フィットネス

クラブに通う中で定着してきたトレーニングメニュー。したがって真面目に考えれば、師匠のスンソクが弟子のガピルに対して指示する肉体改造のための指導方針は、スポーツ医学的に見ればムチャクチャ……。すなわち、いきなりこんなハードな特訓を課せば2～3日でダウンし、あちこちに身体上の故障が出てくることは明らか……。しかも、こんなド素人が40日間の特訓で高校生チャンピオンに挑戦するなんて、それもムチャクチャ……。したがって、この映画に観る特訓風景はある意味マンガ的だが、この映画とガピルの良さは、そのマンガ的な描き方の中に「父親像」についての真実味を見せつけているところ……？

中年おやじにも誇りが……

この映画の主人公ガピルが、なぜテウクに対して一矢報いたいと思ったのか？ それは世のおやじ族なら誰でも理解できるはず……。ところが、ケンカも弱く、心も弱い平凡なサラリーマンである中年おやじの現実、容易にそれを行動に移せないばかりか、教頭やテウクから受けた屈辱の鬱憤をさらに自分より弱い立場の妻や傷ついた娘にぶつけてしまうからタチが悪い……？

教頭やテウクからコケにされたガピルが病院に戻り、ダミに対して「隙があるからこんな目に遭うんだ！」と怒鳴りつけたのが、まさにそれ。中年おやじのあなたなら思い当たる節がいくつもあるはず……。もちろん、そんな発言は口に出した直後に後悔するのが常だが、それは後の祭……。

愛娘から「お父さんとはもう会いたくない」と言われたガピルだったが、ここで立ち上がらなければ、平凡なサラリーマン、中年男は永久に浮かばれない……。ガピルが「娘が殴られた分、俺の手で殴り返したい」と誓うまでにはいくつかのプロセスがあったが、この映画はそれを一方ではきわめてマンガチックに、しかし他方ではきわめて感動的に描いていく……。

『ロッキー・ザ・ファイナル』 vs. 『フライ・ダディ』

『ロッキー』シリーズが1976年から2006年の30年間に6本も製作され、そのすべてが大ヒットし、世界中の観客から愛されたのは、ロッキーのひたむきに生きる姿勢に観客が感動したため。そして、『ロッキー』シリーズのハイライトは毎

回ラストに展開されるリング上のファイト・シーン。そして『フライ・ダディ』のハイライトシーンも、ボクシングのレベルは月とスッポンながら、それと同じ。

その舞台は、チョンソル高校の体育館内に急遽全校生徒を招集し、教員たちを締め出して設定された試合会場。スンソクの挑発に乗ってこのリング上に登場したテウクは、何が何だかわからないうちに、リング上でカッコいい(?) ガウンに身を包んだ中年男ガピルの挑戦を受けることに……。しかし、私に言わせれば、「師匠、あんたのやることはムチャクチャだよ」ということだし、リング上では予想どおりの展開が……。すなわち、ガピルはパンチはおろかテウクの身体に触れることさえ全くなく、一方的に顔やボディにテウクからのパンチを受け続けるだけ……。しかし、それでも『ロッキー』シリーズのハイライトシーンと共通するのは、打たれても打たれても、倒れても倒れてもまた立ち上がっていくところ……。

そんな中、リング上では誰もが予想しなかった意外な展開が……。このボクシングの試合のマンガぶりと感動はあなた自身の目と感覚でしっかりと確認してもらいたいもの……。そして、『ロッキー・ザ・ファイナル』とこの『フライ・ダディ』を対比しながら、その感動の度合いについても、十分比較検討してもらいたいもの……。

日本版も観なければ……

この映画の原作は、金城一紀の『フライ、ダディ、フライ』。その映画化は日本の方が先で、成島出監督、岡田准一、堤真一主演による『フライ、ダディ、フライ』(05年)が公開されたが、残念ながら私は見逃していたもの。韓国版『フライ・ダディ』を観た後少し調べたところによれば、原作と日本映画は微妙に違うし、この韓国版『フライ・ダディ』も描き方は大きく違っているみたい……。したがって、私も原作を読むところまでは無理だとしても、日本版『フライ、ダディ、フライ』は近いうちに観なければ……。

2007(平成19)年3月5日記